慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	利光三津夫先生を偲んで
Sub Title	
Author	寺崎, 修(Terasaki, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.4 (2010. 4) ,p.174- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	利光三津夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100428-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

利光三津夫先生を偲んで

平成二十一年九月十三日、利光三津夫先生が急逝された。この日の夕刻、同門の稲葉光彦氏（常葉大学副学長）から「利光先生が出先で倒れた。危険な状態で救急車で搬送中」との第一報が入り、三十分もたたないうちに「先生が亡くなった」との続報が入ったのである。ご令息利光三律氏の話によれば、氏の脇で突然崩れるように倒れ、まさに一瞬の出来事だったという。

先生は、現役を退いたあと、持病の糖尿病の悪化で慶應病院に入院されたこともあったが、それも見事に克服され、最近は従前通りの豪放磊落な日々を過ごされ、後進に対するアドバイスも的確で冴えわたっていた。亡くなる五日前の九月八日には、門下生を京王プラザホテルに招集し、常任理事に就任したばかりの長谷山彰君の「励ます会」を主催するなど意気軒昂で、よもや先生が間もなく亡くなるなどとは、誰一人として夢想だにしなかった。それだけに私たち門下生は、今でも先生の死を正面から受け入れることが容易ではない。私たちが先生からうけた恩恵が計り知れないほど大きかったこともあるが、なによりも先生の死を受け入れる「覚悟」も「準備」も整っておらず、文字通り茫然自失の状態が続いているからである。先生がお元気であったことをいいことに、先生から受け継ぐべき学問上の遺産について私たちは余りにも淡泊・鈍感であり、その継承が十分に果たせないままになってしまったことは、いまさらながら悔やまれる。

私が先生から学問上のご指導をうけるようになったのは、昭和五十二年、恩師中村菊男先生が亡くなり、指導教授を失ってからである。利光先生はよく「自分の門下生は履歴最悪、学界の流れ者ばかりだ」と仰っていたが、まさに私もその一人だった。しかし、先生は、「学界は不公平なところもあるが、他の社会と比較すればはるかに公平であり、無名の若手研究者が有名な大家を一気に倒すこともしばしばある」と自らの体験をふまえながら、「歴史研究」の醍醐味を語り、私たちに大きな夢と刺激を与え続けられた。先生は、それぞれが鍛錬して腕を磨き、道場破り（他流試合）を重ねることの重要性を力説され、論文の書き方や論争の極意についても、包み隠さ

ず伝授して下さった。そして先生は「学界に善名をとどろかせることが無理ならば、悪名でもいい。一番いけないのは、学者の道を志しながら無名で終わることだ」とも仰った。先生のアドバイスは、大体において道徳に背を向けるものが多かったが、かえって私たちを奮い立たせる魅力に溢れていた。

また先生は、ややもすると自己流の近代日本研究に陥っていた私に、相当の危惧の念を抱いたらしく、明治法制史の泰斗手塚豊先生のもとで、基礎から徹底して勉強し直すことを命じられた。先生はおそらく、名誉教授の手塚先生と事前相談をされ、その上でそのような命令を出したのではないかと思うが、私自身としては、人一倍厳格で容赦ない指導をされるとの噂が高かった手塚先生のもとで勉強をすることなど、正直いってあまり気の進まないことであった。実際、手塚先生の指導は予想以上に厳しく、悪戦苦闘の連続だった。私は、志木の手塚先生のご自宅で毎月一回開かれる勉強会に欠かさず出席し、なんとか実証主義の手法を身につけようと努力したが、一定の成果を生み出すまでには結構長い時間がかかった。けれども、この間に学んだ徹底した資料収集の方法や厳密な実証の方法、さらには厳格な資料批判の方法など、大学の教室ではとうてい接することのできない実証主義の奥義のようなものを実地に学習できたことは、なにものにも代えがたく、今も私の大きな財産になっている。

今にして思えば、利光先生の私に対する指導は、当時の私の弱点を見抜いた上での、実に適切な指導であったと思う。利光先生のもとにいなかったならば、学界の通説に立ち向かう勇気を持てなかっただろうし、手塚先生のもとで修行する機会もなかったように思われるからである。一般に、利光先生というと、『律の研究』や『律令制とその周辺』、さらには福沢賞を受賞した『続律令制の研究』など、十数冊の学術書を書き上げた研究一筋の碩学と思われがちだが、実際のところ、先生は、門下生の指導にも卓越した手腕を発揮した類い稀な教育者でもあったのである。

慶應義塾の日本政治史・日本法制史研究の伝統は、手塚豊、中村菊男、利光三津夫・中村勝範の四先生を主軸として形成されてきた。その学風は、堅牢な考証に支えられた実証主義歴史研究であるという点で一致しており、各先生方はそれぞれ、画期的成果を生み出してこられた。しかし、私たちは、いまや手塚豊・中村菊男の両先生に続いて、利光三津夫先生までをも失ってしまった。先輩

教授たちが血の出るような努力をして築き上げてきた誇るべき学風を私たちはいかにして守り、発展させていくべきなのか。利光先生は私たちに、とてつもなく重い仕事を与えて、旅立たれたような気がする。

名誉教授
武蔵野大学長　寺崎　修

偉大なる恩師、利光三津夫先生を偲ぶ

昨年九月、わが恩師、利光三津夫先生が急逝された。巨星墜つの感しきりである。

訃報に接して一瞬、まるで全身を激痛が走ったように感じられた。しばし茫然自失。気を取り直して、あわただしく各方面に連絡を回した。そして、私は早朝の研究室で一人号泣した。

私事ながら、私はいまジストニアという神経難病と日々闘っている。発病、はや四年である。見た目にはわからないが、本人は両足が固縮して歩くに難渋し、脂汗が滲む。

しかし、恩師、利光先生はもっと重い生死にかかわる大病をされ、若くして片足を失い、義足の人生を過された。不肖の弟子とはいえ、私が弱音を吐くわけにはゆかない。つらいと、先生のご苦労に思いをいたし、自らを奮い立たせてきた。

亡くなる前の週、新宿のホテルでひさしぶりに利光先